

【シンポジストより】

地方百貨店において「社会人」であること

山崎 航平（株式会社川徳）

現在の主たる業務は、販売員です。紳士カジュアル服のコンサルティング・セールス、お直しといった接客販売に加え、外商顧客への商材提案、商材の発注・返品・棚卸、商品陳列・売り場づくり、商品の包装、POS レジ操作・カード発行・勧誘や顧客照会といったキャッシュ業務、POP 作成、各種催事会場設営・撤収などを担当しています。その他に経験した業務としては、ギフトセンター承り業務、催事の商品提案および広告原稿の作成、「スヌーピー・ファンタレーション展」といった催事の企画・運営応援があります。

「社会人になる」ことが、「(私) 企業社会の一員になること」であると解釈すれば、「社会人になる」とは、「企業の利潤追求に役立つような人間になる」、といったところでしょう。私がいたころの大学教育は、主にこの目的をうまく達成できるような人間の育成に力が入っていたように思います。地方百貨店の販売員として2年近く奉職して思うのは、それはホワイトカラーとしての、という条件つき、だったような気がします。というのも、少なくとも販売職である限り、大学教育で得たものは、業務上、役に立ったり立たなかったりするからです。「グレーカラー」である私のように、販売員のような職業に就く人々が、どのように大学教育で手にしたものを役立てていくのか、また、そもそも役立てる必要があるのかという問題には、一通りではない答えが用意されているように思います。

社会人になるとは、社会で自分の居場所を見つけるということ

吹田 ひより（青森県心理職）

私は青森県の心理職として採用され、現在は児童相談所に勤務している。様々な相談に応じて心理アセスメントをすること、愛護手帳(知的障害を有する児童のための療育手帳)の判定を行うことが主な業務である。心理検査を実施したり、児童福祉司と共に児童や保護者と面接を行ったりして記録をまとめる。他機関との連携もあり、現場に出ることは多い。

社会人になってからは毎日が一瞬で過ぎ去り、気づくと雪が降り始めている。社会人について、負の側面はプライベートの時間が限られること、与えられた仕事には責任が伴うことが大きいだろう。一方、正の側面としては、生活を安定させうえて、社会を支える側になること、社会で自分の居場所を見つけられることが挙げられる。強制的に社会と繋がる、ということは、正と負の両面を持っているように感じられる。

学生生活を振り返って思うのは“自由だった”ということ。学業・サークル活動・アルバイト等と忙しく過ごす大学生が多いと思うが、時間をどのように使うかを自分で選択できる、というのは有難いことだった。大学生活が“人生の夏休み”と呼ばれるのは、社会人になってその素晴らしさを改めて噛み締めるからである。社会人になる前にぜひやってほしいのは、大学生の自由な時間を使って様々な体験をすること。色んな活動を通して視野を広げ、観察眼を磨き、コミュニケーション能力を備えることは、どの業種においても役立つと考える。重ねた経験は人生の糧となり、エピソードトークとなり、普段の会話や飲み会でも